

THE CYBORG GIRL STORIES
エメラルド・アイ 3

最終話 幕開け

福富雅樹【著】

登場人物

久坂裕美……高校三年生。サイボーグ少女〔エメラルド・アイ〕。

久坂喜美子……高校三年生。

久梨原綾……裕美の部下。

フェイス……変身能力を持つ超能力者。

椎野美佳……白髪の少女。未来を見通す力を持つ。

八十神忠士……組織に殺された裕美をサイボーグ手術で蘇生させた科学者。

1 雨

一度は柏城那悠の意識を飲み込み、那悠の肉体を支配した魔界の王ダイヤモンドの分身テトラモルフ。しかし、天界の王デイグリーの分身ラシフェール（椎野美佳）が那悠に託したアーカーシャの石の力で、那悠の肉体にかすかに残った那悠の強い意思が目覚め、テトラモルフの意思を逆に飲み込む。

そして、那悠は自らの命と引き替えに自分の全ての血を体外へ放出し、雨に変えて、地上に正体を現した魔物たちを血の浄化魔力で一掃した。

「傘、持つてくるんだったなあ」

土砂降りの赤い雨から逃げるように椎野美佳はデパートの入口に駆け込んだ。

デパートは既に政府から住民避難命令が出され、無人となっている。

美佳は手にしていた黄金銃を足下に置くと、血の雨で真っ赤に染まった上着をその場に脱ぎ捨てた。

「全部血だらけだ。どうせ誰もいないし、服をもらっちゃおうかな」

美佳はデパートのショー・ウインドウに飾られたマネキン人形の服を見た。

へ駄目ですわ、美佳さん

その時、美佳の足下にあつた黄金銃が高さ五〇センチほどの少女のフランス人形に変形し、美佳に向かつて、言った。その黄金銃は、黄金のフアレイヌごとエリナであつた。

ちなみにフアレイヌは、人間の魂を金属の粉末に封じ込める悪魔の魔術の名称、もしくははその術を受けた者の名称である。

「相変わらずお堅いね、エリナは。くしゅん」

美佳はクシヤマをした。

その時、美佳の前を大きな黒い傘をさしたトレントコート of 男が通りかかった。

「ゼーテース」

男を見て、美佳は呟いた。

「姿を見ただけで、俺がゼーテースとわかるか？」

男は美佳の方を向き、傘を少し上げた。

「久しぶりね。悪いけど、またあんたの計画を潰させてもらったわ」

「構わないよ。もう千年以上同じことを繰り返しているのね。いくら失敗し

ようと、一度成功すれば、いいんだ」

「相変わらず、むかつく」

「そんなことより、君はとつくに覚醒しているのに、なぜ行動を移さない？」

「そりゃあ、私が椎野美佳だからよ。私が私であるかぎり、私のやりたいようにやるわ」

「君が椎野美佳であるという証は何だ？」

「殺さないで済むものなら、絶対に殺さない」

美佳は真顔で言った。

「なるほど。君らしいよ。しかし、天界がいつまでもそれを黙って見過ごすかねえ」

「そうだったら、その時、考えるわ」

「……」

男は美佳のもとに歩み寄ると、傘を美佳に渡した。

「これを使え。風邪をひくだろう」

「買収しても無駄よ」

「くだらん。この体は使い捨てだ。濡れても構わないんだよ」

男はそう言うと、赤い雨の中を歩き始めた。

「ゼーテース」

美佳は男の背中に呼びかけた。

「何だ？」

男は美佳たちに背を向けたまま、足を止めた。

「エリナに挨拶ぐらいしたら」

「せっかく人間になれたのに、それを手放して、フアレイヌに戻るような女に

知り合いはいないよ」

男は再び歩き始めた。

∧…∨

エリナは男の姿が消えるまで男の後ろ姿を黙って見送った。

「さて、行くよ。当分は逃亡生活になるけどね」

美佳はエリナの頭に手を優しく置いて、言った。

2 世間話

三月下旬。

ファミリー・レストランの二人席で二人の少年が話をしていた。

「元々、人間に化けた怪物がいることを世間に知らしめたのは俺たちなのにな」
少年の一人が不機嫌に読んでいた雑誌をテーブルに置いた。「いつそ、マスコミに電話するか」

「よせよ。警察に捕まっちゃうぞ。そもそも、俺たちだって、ネットで知り合った男から目薬、受け取って、それで人間と怪物を見分けることが出来たわけだ。要は、俺たちもその男に利用されたんだよ」

「けどよ、警察は、最初は怪物なんていないとか言って、俺たちを犯罪者集団、呼ばわりしてたんだぜ。それが例の怪物事件の後は、人間が怪物化したのは、テロ組織のばらまいた細菌兵器のせいだってよ。ふざけんなっての」

「人間の遺伝子構造を変化させるウイルスだっけか。確かにそんなものが実際にばらまかれたなら、俺たちだって、とっくに怪物になってるよな」

「おまけに怪物を消滅させたあの赤い雨は、CCC（サイボーグ警察部隊）が緊急開発した抗ウイルス剤だつてよ。都合よすぎだつての」

「CCCと言えば、怪物事件の時に街で暴れてた武装ロボットもCCCが倒し

たとか言ってたよな」

「その武装ロボット、ネット動画に上がってたけど、美少女ロボットだったらしいぜ」

「まじか。動画あるなら、見せろよ」

「もう削除されちゃまったよ。国家何とか法とかで、今は規制がうぜえから」

「面倒な世の中になったな。もしかすつと、あの怪物事件は政府の仕業じゃねえのか？」

「はあ？」

「あの事件のせいで、警官とか、議員や官僚も結構死んで、今はCCCが権力握ってるんだろ。そのうち、警官はみんなクローン・サイボーグになっちゃうんじゃないかねえのか」

「恐ろしいこと言うなよ」

少年たちはそれきり無言になってしまった。

3 訪問

老人介護施設緑化荘。

「椎野さん、ちよつといい？」

食堂で車椅子の老人に食事の世話をしている女性ヘルパーに同僚が声をかけた。

「田部さん、ちよつと待ってて下さいね」

ヘルパーの椎野律子は同僚のところへ行つた。

「面会よ。刑事さんだつて」

「刑事？」

「田部さんの世話は私がやるから、行つてきなさい。待合室よ」

「はい」

律子は廊下を走つて、待合室へ行つた。

待合室には女性が座つて、待っていた。

「椎野律子ですけど」

「失礼しました。警視庁捜査一課の白木です」

白木亜里砂は立ち上がり、律子に警察手帳を見せた。

「何か御用でしょうか？」

律子はエプロンを取った。

「座って話しません？」

「ええ」

律子はテーブルを挟んで、亜里砂の反対側の椅子に座った。

「単刀直入に言います。妹の美佳さんの件で」

「何でしょうか？」

律子の表情が曇った。

「妹さんが刑務所を脱獄しました」

「いつですか？」

「一ヶ月ほど前です。公表はされていません」

「どうして……」

「実は、彼女の死刑執行が急遽決まり、本当なら今日、行われる予定でした」

「待って下さい。美佳は無期懲役の判決を受けたはずでは？」

「CCCのテロ危険人物リストに掲載された人間は、過去の判決に関係なく、

死刑を執行できるように法が改正されています」

「……美佳の居所は知りません。もう何年も面会には行ってませんし、何もお

話しすることはないと思います」

律子の目は警戒心に満ちていた。

「そうですか。ここだけの話ですが、私は妹さんが逃げてくれてホツとしていきます」

亜里砂が小声で言った。

「え？」

「私は非科学的なことは信じませんが、妹さんが世界を救うために活動してきた事実は真摯に受け止めています」

「あなた……」

「この先、あなたもCCCによる監視を受けるでしょうから、十分、お気を付け下さい」

亜里砂は律子の手の上にそつと手を置いた。

4 決意

久坂喜美子は、五月下旬、石坂保と水瀬初美と渋谷駅で待ち合わせた。

「久しぶり」

「喜美子も元気そうじゃん」

喜美子と初美は両手を合わせて、久しぶりの再会を喜び合った。

「二ヶ月ぶりだよね」

「うん……」

「もう体の方は慣れた？」

喜美子は尋ねた。

「もうすっかりね。サイボーグの時より違和感ないかも」

今の水瀬初美の体は裕美が造り出した死んだ水瀬初美のクローンで、彼女の脳は、サイボーグの肉体を失った楚世城瑠香の脳を移植したものである。

つまり、肉体は水瀬初美だが、心は楚世城瑠香であった。

「話なら、後でしようぜ」

「そうだね。ケーキの美味しいところ、見つけたてあるの。行こう」

「オツケー」

喜美子は石坂と初美を案内して、渋谷駅から程近い洋菓子店に立ち寄った。この店は一階が販売カウンターで、二階が客席になっている。

喜美子たちは一階で好みのケーキと飲物を購入し、二階の窓際の席に座った。初美と石坂が隣同士で座り、テーブルを挟んで向かいの席に喜美子が座った。「あーあ、すっかりラブラブになってるわね。これでも私、元カノなのよ」座っても手を繋いでいる初美と石坂を見て、喜美子がため息をついて、言った。

「知ってるよ」

初美が言った。

「それもそうね」

「ねえ、大学には行ってるの？」

初美がストローでアイスコーヒーを口にしてから、言った。

「当たり前でしょ。そのために入ったんだから」

「慶明大の教育学部だっけ？ すごいよな」

「保は落ちちやっただよね、大学」

初美がクスツと笑って、言った。

「うるさい」

「予備校、行ってるの？」

「いや、今は出版社でバイトしてる」

「受験、諦めたの？」

「まあな。いつまでも親の世話になるわけにいかないし」

「私は学校、行ってるよ」

初美が付け足すように言った。「けど、行くのやめようかなと思って」

「どうして？」

「あたし、これでも二十六だよ。学校の勉強だって、随分やってないし、今更、

わかんないよ」

初美が愚痴った。

「……」

「ごめん、喜美ちゃんに言っても仕方ないよね。でも、私、早く保と結婚した

いんだ」

「えーっ！！！！」

喜美子が声を上げた。「結婚するの？」

「悪い？」

初美が喜美子を睨んだ。

「いや、早いんじゃないかなと思つて。石坂君だつて、まだアルバイトでしょ。両親が許すかな……」

「できちゃった結婚なら、両親も反対しないでしょ」

「妊娠してるの？」

喜美子が目を丸くした。

「勘違いするな。してないよ」

石坂が慌てて訂正した。

「そう……」

「ただ、俺も結婚は考えてるんだ。こいつにはもう時間がないから」

「時間がない？」

「私の体の耐用年数ね、十年なの」

「……」

喜美子は言葉を失った。

「そんな深刻にならないでよ。私は人間の体に戻れただけで、幸せなんだから」

「けど……」

「精一杯、生きたいんだ、保と。子供作つて、家庭を作るの」

「俺も初美と……いや、瑠香との時間を大事にすることに決めただ」
「ううっ……」

喜美子が急に涙ぐんだ。

「泣かないでよ」

初美が慌てた。

「だって、そんなこと聞いたら……」

「私たちの結婚式には来てよね。多分、小さな式だけ」

初美は笑った。

「絶対、行く」

喜美子は涙を拭いて、強く言った。

「よかった。今日はそれを報告したくて」

「綾さんには言った？」

「喜美子から伝えて。一緒に住んでるんでしょ」

「うん、わかった」

「え、一緒に住んでるんだ？」

石坂は驚いて様子で尋ねた。

「本当は高校卒業したら、家を出て、大学の近くに部屋を借りる予定だったんだけど、綾さんが家に引越してきてくれて、家賃を払ってくれるって言うから、結局、一緒に暮らすことになっちゃったの」

「喜美子はレズだから、ちょうどいいよね」

「あたしはレズじゃない！」

喜美子は大声で文句を言った。その声に周囲の客が喜美子たちを見る。

「もう、バカッ！！」

喜美子は顔を真っ赤にして、ケーキをばくついた。

5 告白

夜。

「送ってくれてありがとう」

喜美子は自宅の前で石坂に言った。

「あ、ああ」

石坂は何か言いたそうな顔をしていた。

喜美子は何かを察して自分から口にすることにした。

「迷ってるんでしょ？」

「え？」

喜美子の言葉に石坂は戸惑った。

「楚世城さんとの結婚」

「……」

「よくわかったな」

石坂は元氣なく言った。

「どうして？」

「留香のことは好きだ。だけど、今のままだと俺、同情で結婚しちまいそうなんだ」

「石坂君……」

「ごめん」

「どうして謝るの？」

「こんな話するべきじゃなかったな。元カノに」

「私にはもう恋愛感情はないんでしょ」

「……」

「ないって言って。許してあげるから」

「ああ、ない」

その言葉を聞いた時、なぜか喜美子の目は涙で潤んだ。

「どうした？」

「目にゴミが入っただけ」

喜美子はうつむいて、涙を手の甲で拭き、笑顔を作って、顔を上げた。

「許してあげる。大丈夫、石坂君の楚世城さんへの愛情は本物だよ。命がけで守ろうとしたじゃない。楚世城さんを大切にしないで。傷つけたら、許さないからね」

「わかってる。じゃあな」

石坂は歩いて、帰っていった。

「まだ、私、好きな感情、あつたんだ……」

石坂の背中を見ながら、喜美子はぼつりと呟いた。

6 帰宅

「ただいま」

自宅に鍵でドアを開けて入ると、喜美子は玄関で、薄暗い廊下の奥から僅かに明かりの漏れているリビングに向かって、大声で挨拶した。

しかし、リビングからはかすかにチャカチャカとした音楽が漏れ聞こえてくるだけで、誰も出てくる様子はない。

喜美子は家に入り、リビングを覗き込んだ。

リビングでは、綾が座椅子に座り、ミニコンポで音楽を聴きながら、雑誌を読んでいた。

「ただいま」

喜美子が綾の方に近寄り、挨拶した。

「あつ、おかえり」

喜美子に気づいた綾はヘッドホンを外して、挨拶した。

綾はコンポの電源をリモコンでオフにした。

「瑠香と石塚君に会ってきたんでしょ」

「うん」

「元気にしてた？」

「ラブラブで、近いうちに結婚するかもしれない」

「そうなんだ。どうかした？」

元氣のない喜美子に綾は尋ねた。

「楚世城さん、十年しか生きられないって」

「そうみたいね」

「知ってたの？」

「私は、（初美のクローンへの）瑠香の脳移植手術には携わっていないけど、技術的にはそれでも長い方だと思うわ」

「でも、また別の体に移植すれば……」

「そんな単純にいくならね」

「冷静だね、綾さんは」

「それでもないよ。私だって、いつ自分の中の機械が故障して、止まるんじゃないかって恐怖に晒されてる」

「ごめんなさい……」

迂闊なことを行ってしまったと思った喜美子は、顔色を変えて、謝った。

「気兼ねはなし。私たちは友達でしょ。少なくとも、私は喜美子には何でも言うてきてほしいな」

綾は優しく言った。

「綾さん……」

喜美子は急に涙ぐんだ。「私、裕美に会いたい……」

「喜美子……」

「会って、謝りたいの。もう一度、裕美と家族みたいに暮らしたい」

「それは無理よ」

「どうして？私、裕美のこと、愛してるの。本気よ」

喜美子は真剣な表情で言った。

「もう裕美は、私たち鉄の誓いを結んだ仲間と全ての連絡を絶ったわ。お金と

私たちの体のアフターサポート先のアドレスを残してね」

「裕美は何をしようとしているの？」

「彼女の目的は、自らの体を葬ることだと思う。ただ、自殺するだけでは駄目。

彼女の体にある無限動力もろとも、消さなければならぬ」

「今のままじゃ駄目なの？」

「今のままなら、いずれ裕美が死ねば、無限動力が暴走し、日本がなくなるかもしれない。裕美はあなたを死なせたくないのよ」

「なら、八十神さんに頼めば。八十神さんが無限動力を作ったんでしょ」

「裕美はもう先生を信じてはいないわ」

「どういうこと？」

「ごめん、それ以上は言えない」

綾はそう言うと、ヘッドホンをはめ、コンポの電源をリモコンでオンにした。

それきり、喜美子は綾に話を聞けなくなってしまった。

7 捜査一課

警視庁捜査一課。

「課長、俺に白木の行方を追わせて下さい」

篠田捜査一課長の席に黛刑事が直談判に行った。

「何のことだ？」

篠田は黛を見ることなく、淡々と書類に目を通してている。

「あの事件以来、白木は行方不明なんですよ」

「人聞きの悪いことを言うな。白木はもう辞めたんだ。本人から退職願も出て
いる」

「そんなもの、信じるんですか？俺たちに何の挨拶もないんですよ」

「上が受理した以上、こちらとしては何も言うことはない」

「……」

黛は唇をきゅつと結んで、課長の席を離れた。

ちっ、もはや、誰もあてにならねえ。

黛はコートを手にし、捜査一課を出ていった。

8 逃走

深夜、フェイスが街の中を必死に逃走していた。

「はあっ、はあっ、はあっ——」

フェイスの呼吸は激しく乱れていた。

フェイスの右手には光ディスクの入ったケースが握られている。

フェイスは走りながら、何度も後ろを振り返り、迫り来る何かに怯えていた。通りを歩く人々は、フェイスの必死な姿にほとんど関心を示さない。

フェイスは繁華街のビルとビルとの間の細い脇道へ入り、一本道を直進した。この奥にはマンホールがあるはずだ。そこから下水道へ逃げれば、何とかなる。

しばらく走ると、そこは袋小路で行き止まりとなっていた。

フェイスは壁の前で止まった。フェイスのすぐ足下の地面には錆びついた旧式のマンホールがある。

フェイスはマンホールの蓋の取っ手を掴み、力を入れた。

かなり重い、鉄の蓋は少し持ち上がった。

フェイスは渾身の力を込め、鉄の蓋をマンホールの横までずらした。

「おし！」

フェイスは大きく息をついた。

だが、その時、フェイスの前に、宙に浮く白いボールが現れた。

「何だ、あれは……」

フェイスは呟いた。

特殊合金のボール型のボディ。正面に三つのカメラレンズ。下部に二つのアーム。左右にレーザービーム砲。頭部に赤いサイレンが付いている。真下と後部には半重力エンジンが搭載されている。

このボール型ロボットはサイボーグ警察部隊が開発した犯罪者追跡マシン「マングース」であった。

「被疑者、発見。あなたを建造物不法侵入、窃盗の容疑で逮捕します」

マングースは人間に近い女性の声で言うと、カメラの下の液晶モニターに逮捕状の文面が表示された。

「ふざけんな、機械なんかには捕まってたまるか」

フェイスは怒鳴った。

「従わない場合、強制執行に出ます」

マングースのレーザービーム砲がフェイスに向けられた。

「ちっ」

フェイスは思いきってマンホールの中へ飛び降りた。

「発射」

マングースからレーザーが発射される。しかし、レーザーは空を切った。

「被疑者、地下へ逃走。追跡します」
マングースはマンホールを降りようとした。だが、大きなボデイが邪魔でマンホールに入れない。
「被疑者、地下へ逃走。タイプB、応援を頼む」

9 下水道

「ぐわっ」

マンホールに落ちたフェイスは地面に尻を打ちつけた。

「いてて」

フェイスは尻をさすりながら、立ち上がった。

フェイスはマンホールのある頭上を見上げた。地上から地下までは三メートル近くある。マンホールの穴は、強引に入ろうとするマングースのボデイで塞がっていた。

「ガラクタめ……」

フェイスはペンシル・ライトを灯して、下水道を歩き始めた。

しばらく下水道を歩いていて、フェイスはふとジーンズの後ろのポケットに手をやった。

ない！

フェイスは立ち止まった。

フェイスは慌ててジーンズの後ろのポケットに手を突っ込んで、探ったが、何もなかった。

「ちよつと待てよ……」

フェイスは真つ青になった。

フェイスは着ていた衣服のあらゆるポケットを両手で探ったが見つからず、ついには周囲をペンシル・ライトで照らして、探し始めた。

「ちつ、あれがなきや、何のために危険な思いしたかわからねえじゃねえか」
フェイスは焦りだした。

逃げることも忘れ、ディスクを探し回る。

だが、十分たつても、見つけることが出来なかった。

「畜生、なんてへまをやったんだ」

フェイスは悔しさにわめき散らした。

その時、遠くから水のはねる音がした。

追っ手か？

フエイスはペンシル・ライトの光をゆっくりと音のした方へ移動させた。

光が数メートル移動した時、下水道の奥に巨大な人の影を映し出した。

「ひっ！」

フエイスは思わず悲鳴を上げた。

「私よ」

ライトの光の先から女の声が出た。

フエイスはあらためて光を向けると、そこには一人の女が立っていた。久坂

裕美であった。

「脅かすなよ！」

フエイスは悲鳴を上げた気恥ずかしさをごまかすように怒鳴った。

「約束の時間より遅れてるわよ」

裕美は感情のない目でフエイスを見た。

「デイスクを落としたんだよ」

「これのこと？」

裕美はプラスチック・ケースを見せた。

「それは……拾ったんなら、言えよ」

フェイスが文句を言った。

「もしかして、追われてる？」

「そうだよ。これで借りは返したからな。俺は行くぞ。じゃあな」

その時、ビオの背後に赤い光が見えた。

あれは……

フェイスの顔に緊張が走った。

「どけっ！」

フェイスは目の前の裕美を押し倒した。

レーザーサイトの赤い光線がフェイスの額に当たる。

ウーン！！

次の瞬間、フェイスの額に青いレーザー光線が命中した。

「ぐおっ」

フェイスは後ろへ倒れ、下水が水しぶきをあげる。

「フェイス！！」

裕美は起きあがり、声を上げた。

裕美はすぐにフェイスを抱き起こした。フェイスは目を見開いたまま、気を失っていた。

裕美の背後から一台の浮遊物体がやってくる。それは上にいたボール型の追跡マシンと異なり、エイのような形をしていた。ボディは黒。両翼の下部にレーザー・ビーム砲。中央下部に機関銃が装備されている。

「こちら、P A二五。被疑者を発見。これより、検挙します」

追跡マシンがゆっくりと裕美の方に近づいてくる。

裕美はフェイスを静かに寝かせた。

「……」

「緊急連絡、緊急連絡。被疑者の他に身元不明の少女を発見。データ検索開始」

その時、追跡マシンが裕美の画像を転送し、本部に照合していた。

「犯罪者データ該当なし。これより少女を拘束します」

追跡マシンのレーザー・サイトから赤いレーザー光が発射される。

裕美は追跡マシンの方を振り向いた。

赤い光線が裕美の額を捉える。

「パワー・セーブ、オフ」

裕美の言葉で、裕美の髪と瞳の色がエメラルド色に変わり、背部が射出されたエネルギー・コートに全身が包まれた。

「少女の全身から強力な熱源反応あり」

追跡マシンが本部に異変を伝える。

裕美は次の瞬間、追跡マシンに飛びかかった。

裕美が追跡マシンに抱きつくのと、追跡マシンはエネルギー・コートの高熱でショートするように爆発した。

爆風が裕美を襲う。だが、裕美はしっかりと地面に着地した。

爆風の後、下水道には追跡マシンの残骸が転がった。

10 現場検証

十五分後。

サイボーグ警察部隊のシステム管理部の技術者数名とサイボーグ警官三体が破壊された追跡マシンの調査に出向いた。

「驚いたな、こいつは」

管理部の一人が追跡マシンの破片を手にして、感心した声を上げた。

「外からの高熱でエンジンが内部爆発を起こしたのが原因のようだ」

ともう一人が言った。

「しかし、レイ（追跡マシンの名）は三百℃以上の高熱に耐えられるように出来ているんだぞ」

「それより強力だったと言うことだ」

「バカ言うな。そんなこと——」

「エメラルド・アイだよ」

技術者たちの背後で男の声がした。

「八十神局長」

彼らが振り向くと、そこには、CCC本部長・八十神忠士が立っていた。「裕美、本気で私の計画を潰す気なのだ。面白い。受けて立つよ」

第三部 完

初
版

二
〇
一
一
年
五
月